

ホメオパシーの日本的展開について

村上 千鶴子¹⁾

The Japanese Way of Development in Homeopathy

Chizuko Murakami¹⁾

要約：

補完・代替医療としてのホメオパシーについて概観し、その日本的展開の可能性について論じる。はじめに、ホメオパシーとはどういうものかについて論じ、次に、evidence based medicineとしてのホメオパシーの位置付け、narrative based medicineとしてのホメオパシーの位置付けと特徴について論じた上で、ホメオパシーの日本的展開の可能性を、以下の項目に分けて論じた。1. 漢方薬との共通点と相違点 2. 漢方薬のレメディ化について 3. レメディの日本製原材料について 4. 複雑なレメディ像とその例 5. 風土と医療。その後、2例の事例提示を簡単に行った。結果として、全人的アプローチを要し、対人知覚に優れた国民性をもつ、植生の豊かな日本におけるホメオパシーが、臨床的可能性を大いにもつことが示唆された。また、我々の心身のメカニズムを知る上で、用量依存とは異なった次元の身体機能の説明概念である「波動医学」の洗練が期待され、それによってホメオパシーの治療効果の論理的説明が可能になることが示唆された。

キーワード：ホメオパシー、レメディ、日本的展開、漢方、波動医学

1. ホメオパシーとは

ホメオパシーは、200年ほど前に、ドイツの医師Samuel Hahnemann (1755-1843) によって始められた実証的代替医療のひとつで、ヨーロッパ各地で日常的に使用されている医療である。英国では、医学の一分科として位置付けられており、ホメオパシー専門病院がグラスゴーにある。

ホメオパシー (Homeopathy) の語源は、homoios ; likeとpathos ; sufferingという言葉の組み合わせで、同様の症状を起こすということを意味し、現代医学の医薬品における「異種療法 (アロパシー)」に対して、「同種療法」を指す。Hahnemannは、当時マラリアの治療薬として知られていたキナを服用するとマラリアの症状と同様の症状が出現することを自分の身体で実証した。そこから他の物質についても探索を進め、体系的治療法を確立した。

その基本原理は、①like cures likeと②minimum effective doseである。①は、健康な人に与えたときに出現する症状で苦しんでいる患者に、一定の製法で作られたレメディ (remedy ; 薬) を投与して治療する類似原則 (similar principle) に立った治療法をいう。②は、最少量のレメディで効果的な投与を行うということである。

3000種以上あるレメディは、多くは植物からなり、その他に、鉱物、動物など自然界に存在する様々なものから作られている。レメディは、人間の自然治癒力に働きかけ、回復に向けて刺激を与える。また、レメディは、精製の過程で、攪拌と希釈を繰り返し、理論的には原料となった植物や鉱物、動物の分子が1つも存在しない位に希釈される。その意味で、量的な反応ではなく、自然治癒力に刺激をあたえる何らかの質的な反応を身体に引き起こし、治癒をもたらすと考えられており、

1) 浦和大学総合福祉学部

Faculty of Comprehensive Welfare, Urawa University

精製の過程で、原材料の情報が水の分子構造に作用するという仮説も存在し、ヒーリング処理を受けた水の赤外線スペクトル分析では、「水分子の結合角が正常と比べて若干変化している…（中略）…分子構造が微妙に変化したために、水分子間の水素結合はやや減弱し…（中略）…表面張力も弱くなっていた…」という研究結果が報告されている^[1]。

ホメオパシーの診療でも、西洋医学同様、問診、診察、諸検査、場合によって精査、診断と鑑別診断を行う。それらに加えて、患者の特徴、症状から患者特有な症状・特徴に焦点をあて、精神面（心理面）・身体面（全体・局所）と包括的に患者をみる。患者個々の活動状況のあり方と、同じ様な特徴を持つレメディを採用して治療を行う^[2]。

現在、英国王室では、専属のホメオパシー医がおり、ヨーロッパ各地では、レメディはほとんどの国で医薬品として認可されているが、ホメオパシーを行う治療者には、フランス、オーストリア、ハンガリー、ロシアなど医師のみが行う国と、法的な規制のない国や、また独自の形態を取っている国がある。英国、ドイツでは、代替医療に対しても大幅に保険適用がなされており、ホメオパシーもその対象となっている。現在、ホメオパシーの利用率はベルギーで56%、フランス32%、オランダ31%、デンマーク28%、イギリス16%、アメリカ3%となっている^[3]。アメリカでは、一時高い利用率を示したが、医学団体の排斥運動に会い、その勢力を減衰させている。また、専門家の間でも関心が高まっており、スコットランドの家庭医の約20%がホメオパシーの基礎研修を修了している^[4]。

Liga Medicorum Homoeopathica Internationalis (LMHI) (59カ国が参加) ではホメオパシーの治療に関する以下のような国際的なガイドラインを示している^[3]。

- 1) ホメオパシーはDr.Samuel Hahnemannによって体系づけられた医療である。
- 2) ホメオパシーはホメオパシー医によって行われる。
- 3) ホメオパシー医は、医師の（国家）資格を持つものである。

- 4) ホメオパシー医は少なくとも3年以上ホメオパシーを学ぶ必要がある。
- 5) ホメオパシーの診療は従来の治療と同様のプロセスに加え患者の個別的な問題を扱う。
- 6) ホメオパス（ホメオパシー治療者）は、医師として個々の臨床に適した治療を選択していく。
- 7) ホメオパシー医は、治療者として臨床検査、専門医への紹介、入院などに関して適切な処置を取る必要がある。
- 8) レメディはホメオパシー薬局方に従った厳しい基準を満たした専門のホメオパシー製薬会社によって製造されたものである。
- 9) レメディは薬剤師の責任のもとで販売、あるいはホメオパシー医が処方する。

2. Evidence based medicine（以下EBM）としてのホメオパシー

従来の薬物療法の原則である濃度依存的効果の思考になれた我々には、ホメオパシーは手品のように見えるかもしれない。事実、ホメオパシーの論文が1980年代に世界有数の医学雑誌Lancetに投稿された時、その真偽を査定するのに、医学者と共に奇術師も動員されたことがある。しかし、その手品の種は見付けられなかった。種などはないのである。あるのは謙虚に患者さんと対峙するホメオパス（ホメオパシー医）と豊富なレメディだけである。

これまでに、med-line検索によって検出された科学雑誌掲載のホメオパシー論文は、300余りを数えている。ホメオパシー研究は、1950年頃から科学研究がなされ、1980年代からは、科学的研究に必須とされるランダム化、二重盲検法を用い、プラシーボ群を統制群として多くの研究がなされている^{[5][6][7]}。例えば、1994年には、喘息患者の免疫療法において追試が行われ、ランダム化、二重盲検法を用いて、メタ分析したところ、プラシーボよりも高い水準で有意に効果があつた^[6]。また、ランダム化、二重盲検法を用いて、アレルギー性鼻炎の患者50人にホメオパシー治療を施行したところ、高い有意水準で、プラシーボ群よりも改善がみられた^[7]。これらの研究が発表されると、それに対して活発なコメントの応酬がなされている。

臨床比較研究の蓄積も重要であるが、臨床研究の基本は事例研究である。日本の臨床場面でも効果に関する測定尺度を整備する努力が行われ、難治性アトピー性皮膚炎への適用例^[8]が報告され始めている。今後は日本でも、事例研究による臨床効果の蓄積とともに、科学的手続きに則った臨床研究の蓄積がまたれる。

また、EBMとしてのホメオパシーを発展させるためのもうひとつの方策は、効果の説明理論を確立することである。ホメオパシーの効果を説明する理論は、現在までのところ、決定的なものはない。最も分かり易いのは、Hahnemannが、生命力の反作用と呼んだ仮説^[9]、免疫賦活説である。これは、症状親和的な物質の少量投与による免疫系の賦活化であり、予防接種などでみられる考えである。しかし、それも、ホメオパシーにおいては、科学的に説明するには、濃度が余りに低過ぎる。用量依存では説明できないホメオパシーの効果を理解するためには、従来の説明原理を超えた説明理論が必要とされている。その有力なひとつは、現在波動医学として知られるものである。波動医学では、アインシュタインが $E=mc^2$ で示したように、「物質」と「エネルギー」は同一のものの二元的表現であるという考えに基づいている。つまり、生命の場に作用する系は2つあり、ひとつは近代医学の基礎にある身体細胞系における物質の作用であり、もうひとつは、複雑に制御されたエネルギー場としての存在である。生体では、その2つの系がダイナミックに作用しあっており、その意味で生命体は、多次元的組織体であるという^[10]。近代医学との対比でいえば、「アロパシー医学（通常医学）の薬物動態的なアプローチでは、…（中略）…細胞膜における用量依存性の薬物－レセプター結合率に代表されるような、分子レベルのニュートン力学的相互作用にもとづいている。ホメオパシーでは、微細なエネルギー場の相互作用を通じて、治療による生理学的変化をもたらす微量の薬物が用いられる。…（中略）…薬物のエネルギー的特質はまず、水のような溶媒にうつされ、それから中性の乳糖の錠剤にうつされる。ホメオパシーでは、必要な周波数の微細エネルギーを患者の身体に供給し、…（中略）…薬物の周波数が患者の病状にあえば、共鳴によるエネルギー

の移動がおこって…（中略）…新たな健康の平衡状態へと移行する。」^[11]としている。薬物の周波数と患者の必要とする周波数を合わせるこの方法は「エネルギー周波数マッチング法」とよばれている。また、希釈に使用されている「水」の特異的な性質の観点から、レメディ効果の濃度による弛張性を探索することも興味深い。科学的実証のさきがけとして有名なホメオパシー論文では、その濃度の推移によって、効果に波状の上下動が見られた。これは、ある物理学者によると水の性質のひとつとパラレルな変化を示しているということだが、さらなる研究がまたれるところである。

3. Narrative based medicineとしてのホメオパシー

ホメオパシーの効果が、プラシーボ効果と疑われるのは、その对患者態度の従来医学とは違ったあり方によるところが大きいと考えられる。ホメオパシーでは、患者さんの症状だけではなく、患者さんの性格や生き方、ライフイベントの状況などを詳細に問診するという全人的アプローチを常とする。

レメディ像は、その原材料となった物質の性質・生長環境、気候なども考慮しながら、それと似通った状況にある現実の患者との類似性に注目した処方考え方である。もちろんプルービング（proving；健康な人にレメディを投与し、そこから得られた症状からそのレメディの投与対象の症状を検索すること。ある意味で非常に実証的な手法である。）により得られた症状から処方戦略を立てる、患者さんの症状や性質・症状の態様から該当するレメディを詳しく記載した「レポーリー」という分厚い処方マニュアルもホメオパスには欠かせない。

ホリスティック医学としてのホメオパシーは、患者さんの詳細で正確なデータを得るために、診察に時間をかける。投薬後の変化についても、詳細に質問し、次の方策を考えるという点で、患者さんの物語を注意深く傾聴しながら全体的に理解するという意味で患者本意の医療なのである。

4. ホメオパシーの日本的展開

4-1. 漢方薬との共通点と相違点

漢方医学は、現在世界でも認知度がかなり高く

なっており、代替・補完医療分野でも優位を占めている。漢方薬は、日本でも普及しており、エキス製剤が医療保険に組み込まれると、医療現場でも一気に拡大した。現在では、従来の西洋医学を標榜する病院・クリニックでも処方薬のひとつとして、多くの医師が特に慢性疾患に対して処方している。漢方は中国3000年の歴史の中で、その効果を実証的に積み重ねてきた医療である。ホメオパシーにおけるブルーピングは、健康な人に投与し、その出現する症状を観察するという点では異なるが、実際に投与した結果を詳細に観察する実証に基づく医療であるという点では、共通性がある。西洋薬は、身体の機序に関する知識に基づいて、理論的に一部の機序に働きかける成分を化学的に合成し、投与する。その意味で、分析的、分

解的な手法である。

また、漢方薬とホメオパシーのレメディは、この世界に自然に存在するハーブや動植物を用いる点で類似性がある。一方西洋薬は、多くの場合、化学的人工的に自然界にはそのままには存在しない成分を合成することが多い。漢方薬の場合、その上、原材料のブレンド、つまり複合処方が行われているのが通例であり、その成分は多岐にわたる。それが、効果のマイルド化と副作用の減少をもたらしていると考えられる。漢方製剤の中でも、構成成分が比較的少ないものは効果もシャープな場合が多い。西洋薬の場合は、効果は用量依存的に明瞭に増減する。降圧剤を例にとった実験では、西洋薬の場合、降圧剤の投与量を増加すると、生体の生命維持の危険にもかかわらず、血圧は下が

表1 漢方薬とホメオパシーの異同

	漢方薬	ホメオパシー
歴史・発祥地	2000余年・中国	200年・ヨーロッパ
薬の原材料	自然界の植物・動物など	自然界の植物・動物・鉱物など、あらゆるものが原材料になり得る。
精製法	湯煎抽出、粉碎	主に原材料のアルコール漬けと生成したチンキ液の希釈・振盪の繰り返し
処方内容	原材料の複合	単一あるいはレメディの複合
処方確立の背景	患者への経験的処方の蓄積	ブルーピングによる実証的検証の蓄積
処方探索の対象	患者	健康な人
診断の手がかり	証・症状	全人的アプローチ(症状・性格・生き方)
診察法	問診・腹診・脈診・舌診など	問診に時間をかける。医師の場合、診察・検査は通常医療と同一
効果	証が合えば効く。ある程度まで用量依存、それ以上は非用量依存	非用量依存
薬剤の力価	ある程度まで用量に比例、それ以上はむしろ低下か？(不明)	希釈するほど強力
副作用	あるが比較的少ない。時に西洋薬との併用で重篤な副作用が出現する場合がある。	軽度で少ない。ブルーピングが起こることもあるが、2, 3週間で消失。著効を示す前に一過的に症状が増悪する場合がある(好転反応)。乳児・妊婦にも処方可
処方の期間	ある程度継続する。	1回で著効する場合もある。
処方の頻度	毎日あるいは頓用	1回だけ、あるいは数週間に1度、あるいは1週間継続など様々
西洋薬との併用	まれに重篤な副作用	効果の次元が異なるため問題なし
治癒理論	一部成分効果・その他は未解明(微細エネルギーの関与も考えられる)	波動医学(微細エネルギー場の荷電による調整?)が優勢だが未解明

り続けるが、漢方薬の場合には、生体の許容範囲内では増減が起こるが、多すぎる漢方薬を与えても血圧は正常範囲を超えてそれ以上下がることはないという臨床実験の結果が出ている。

ホメオパシーの場合にも、レメディの数ではなく、ポテンシー（potency；力価、希釈濃度が高いほどポテンシーが高い）や投与頻度で調整するが、元々用量依存ではないので、同じポテンシーのものを一度に多く与えても余り意味がない。

よって、西洋薬では、意図した作用以外の期待しない作用である副作用は、必然ともいえる頻度で生起するが、漢方薬では実証的にその副作用を押さえるべく、相殺効果を意図して一つの漢方処方に多成分が含まれているため、多くの副作用は生起を免れている。しかし近年、西洋薬との併用が頻度を増し、インターフェロンなどとの併用で重篤な副作用が報告されるようになった（柴胡剤と間質性肺炎など）。数千年の漢方の歴史にはない合成成分との併用がもたらした禍である。ホメオパシーの場合の副作用として捉えられるのは、ひとつにはレメディが適合していない場合に、意図せずブルーピングがおこる可能性があるということである。これは、2, 3週間の時間経過の中で治まるとされている。もうひとつは、漢方における「瞑眩」に似た、一過的な症状の増悪「好転反応」である。これは、子供などに生じ易いとされているが、生起した場合この後に顕著な改善がみられるとされている。

ホメオパシーのレメディの場合、国によって、原材料をひとつに絞る単独処方を主とする一派、多種のレメディを混合して用いる混合処方を主とする一派など相違がある。英国では1種類主義、仏独では、混合主義が広く行われている。また、ホメオパスによっても用い方に相違があり、所与の処方では、1回だけと決めている1回主義の者もあれば、何回か同じレメディをポテンシーや投薬頻度を変えながら処方する者もいる。日本ホメオパシー医学会では後者の方が推奨されている。何れにしても、効果が得られなければ、次の処方を考える。

4.2. 漢方薬のレメディ化について

現在フランスなどで活発に行われている、レ

メディの混合処方、種々の症状に該当するレメディの組み合わせからなるが、漢方薬は、その組み合わせが数千年の歴史の中で、実証的に検証されながら、葛根湯の証、加味逍遙散の証といった混合処方を確立してきている。成分一剤による治療よりも合理的な考え方ではある。根本体質を表わすレメディの探索が重要であるとして一剤投与を守る英国流の考え方からは相容れないものであるのかもしれないが、レメディの混合ではなく、原材料の混合であるところが現在のホメオパシーにおける混合処方とは異なる。このような漢方薬のレメディ化も、日本人への処方としては受け入れられ易いのではないだろうか。また、漢方薬の薬効が用量依存だけではなく、他の機序も考えられるところから、漢方、ホメオパシー両者の歩みよりは、薬効の理論付けに有益な示唆が得られるのではないだろうか。まずは、臨床的有効性を実証的に積み上げて行く必要がある。

4.3. レメディの日本製原材料について

レメディ像において、その原材料となる植物、鉱物、動物の育成環境、気候が重要であるのなら、日本人には、日本の環境で育成した原材料を使用するのが最も相応しいと考えられる。現在、英国製、フランス製のレメディが多く使用されているが、それでもかなりの効果が報告されているところを見ると、人類に共通する部分も少なからずあるということであろう。しかし、より適切な効果を望むのであれば、その人の住む風土の中の原材料を使用するのが最適であると考えられる。現在は、インターネットでレメディの注文が可能であり、また材料の持ち込みで独自のレメディ精製も依頼できるようになっている。その場合は、日本人を被験者としたブルーピングを広範に行う必要があるだろう。

4.4. 複雑なレメディ像

レメディ像には、その原材料の産地、気候などが大きく影響している。その意味で、日本の気候風土にあったレメディというものがあるのではないかという考えには容易に至り得る。現在用いているレメディは、多くは欧米諸国産のものである。ホメオパシーにおいては、人間を全人格的に診る

ため、背景にある文化的・地域的な特色には敏感である必要がある。現在のわが国ホメオパシー医療をリードする人材は、むしろ文献の殆ど全てが欧米語、主に英語ということもあり、文化的・人間的資質よりも、英語で書かれた文献への精通度が重要視されている。しかし、それでは不足に過ぎると考えられる。今後は日本の文化・霊性・風土の特徴を人間理解に積極的に採り入れる有為な人材の台頭・育成が望まれる。

ここで理解を容易にするために、ホメオパシーの薬草学のテキストであるMateria Medicaのひとつ、Prismaからレメディ像の例を非常に簡略化したかたちで示す。原著はさらに詳細にわたっている。

【ベラドンナ (Belladonna)】^[12]

世界は悪魔を身の内にもつことで、さらに豊かになる。悪魔の首根っこを踏みつけている限りは。

(William James)

＜分類＞ベラドンナは、ナス科の毒性のある植物で、ナス科の植物は、極地を除く世界中に生育しているが、中心的な地域は南アメリカ大陸のアンデス地方である。古くから鎮痛・鎮痙剤として用いられてきた。

＜植生＞アジアやヨーロッパに生育するベラドンナは、アジアからジプシーによって広がったという。

＜構成成分＞ベラドンナはアルカロイドを含み、他にハイオサイアミン、スコポラミンを含有する。アルカロイドは日差しの強い乾燥した時に最も多く生成される。アルカロイドは種の中に一番多く含まれる。

＜適用＞突然の痛み、高熱、熱による幻覚、焼けるような痛み、拍動性の頭痛、病気の初期

＜心理的動態＞熱で顔は紅潮するが、手足は冷たい、激しい症状が突然発症する

＜部位＞中枢神経、血管、粘膜（目、口、喉）、皮膚、右側のち左側

＜変化＞

悪化：（太陽の）熱、午後、頭を冷やす、汗をおさえる、光、騒音、jarring。接触、輝くものを見る、夜中過ぎ

好転：光をさえぎる、bending backward、横になる、暗い部屋、真っ直ぐに立つか座る、温

かい部屋、うつ伏せ、患部に手を当てるなど
＜主要症状＞

impressionability 共感的、オープン、外向的、状況や事態に強い反応を示す

健康なとき：知性が高く、善良、静かで愛情深い、近寄り難いほど独立的

病気のとき：イライラして乱暴、不平を言う
『時に天使、時に悪魔』

幻覚、他人を殴ったり、蹴ったりしたい、犬や狼のよう（動物的に怒る、他者に向けられた怒り、吠える、噛みつく）、霊的・サイキックな事柄に強い関心

＜食べ物＞

嫌いなもの：コーヒー、飲料、果物、酸っぱいもの、温かい食物、水など

欲するもの：レモネード、ビール、冷たい飲み物、パンなど

悪化：腐ったソーセージ、アルコール、冷たい飲料、熱い食物、酢

改善：冷たい食物、レモネード、コーヒー、サイダー、甘いもの、ワイン

必ずしも全てに該当する訳ではなく、奇妙（strange）でまれ（rare）で特有（peculiar）な点に注目する。映画の登場人物でいうと、『イーストウィックの魔女たち』に出てくる3人の女性がベラドンナに該当すると、ホメオパシー研修会の英国人講師であり、「Homoeopathy in Primary Care」の著者Bob Leckridge氏は指摘している。

4-5. 風土と医療

漢方医学では風土と医療の関連性が比較的明らかにされている。漢方医学は大きく2つに分けられる。中国北東部の黄河文化圏でみられる鍼灸治療と南部の湿度の高い江南文化圏にみられる湯液（漢方薬）治療である^[13]。日本でも、薬湯による和漢薬治療は、富山の薬売りで有名な北陸地方で発展した。薬草による治療は全国各地で伝承されているが、これは日本全体が温暖多湿な気候風土にあることに関係しているであろう。

日本の風土に育まれた植生に根付いたレメディの探索は、日本におけるホメオパシーの発展には不可欠ではないだろうか。植生とその中に住む

人々に対する効果の研究は、ホメオパシーの本場であるヨーロッパでも未だなされてはいない。

ホメオパシーが、その原材料の生育の過程・性質を重視し、レメディを服用する患者の体質、生活環境、行動様式と合わせることで、必要な周波数特性を適合させるという仮定のもとで処方を考えるとき、日本においては、日本で生育した原材料を用いて、日本人によるプルービングを行うことが必要であろう。民族・人種による相違はこれまでのところ全く検討されておらず、西欧文化の中で育まれたホメオパシーの知見を援用、比較しながら実証を積み重ねていかなければならないのではないだろうか。

また、日本では、代替医療が受け入れられ易い傾向があり、yamasitaら^[14]の全国規模の電話調査研究によれば、地域・性別・年齢を調整した1000人の被験者のうち、この12ヶ月の内に、補完代替療法を利用した者が76%であったのに対して、オーソドックスな西洋医療を受診した者は65.6%となっており、代替療法優位の結果になっている。補完代替療法の内分けは、栄養・強壮ドリンク使用が43.1%、ダイエットのサプリメントが43.1%、健康関連器具が21.5%、市販の漢方などハーブ類が17.2%、マッサージや指圧が14.8%、医師に処方された漢方薬が10.0%、アロマセラピーが9.3%、カイロプラクティック・オステオパシーが7.1%、鍼灸治療が6.7%、ホメオパシーが0.3%、その他が6.5%であった。補完代替療法利用の理由については、60.4%が、「医者に行くほど症状は重くない」と答え、49.3%は、「健康増進や病気予防を期待して」と答えている。そしてその費用は、平均19,080円で、オーソドックスな西洋医療の38,360円に比べて半分で済んでいる。医療費の高騰が社会問題となっている現在の日本では、予防医学的見地から、自己責任で自己管理をするという意味でも、補完・代替医療の効果的な利用は推奨される。また、日本では、その補完・代替医療に対する関心が従来高く、抵抗感も少ないため、ごく軽度の症状には補完・代替医療が有効であろうし、西洋薬では治りにくい症状には、効果の次元が異なると仮定されているホメオパシーは有望であろう。ホメオパシーは日本ではまだ知名度が低く、わずかなパーセンテージに過ぎないが、医

師によるホメオパシー医学会ができ、研修が頻回に行われるようになってきているため、その利用者は確実に増加している。医師の中には、ホメオパシーを主体にして採算が取れるまでになっている者もいる。

5. 症例

筆者がこれまでに経験した症例のうち、効果が顕著であった2事例について紹介する。処方の決定は、このときには分厚い文献を前にして手仕事で行っていたが、現在では的確な症状や特徴、生活史などの抽出により、コンピュータプログラム上で数値化して検索できるようになっている。候補となるレメディは多数ある場合もあり、必ずしも第1番目の処方が最適とは限らない。筆者も、数種類ほど試みて無効であった事例もある。

5-1. 洗浄強迫

＜患者＞高校2年の女子学生 17歳

＜主訴＞物に触れたとき手を洗わずにはいられない。

＜経過＞中学3年時、プール掃除中に、教員から底にたまった泥水をホースで吸い出すよう言われた。汚いなと思いつつしぶしぶそれに従ったが、それ以来、不潔に対する強迫観念が生じた。その後、それは強迫行為となって徐々に悪化し、学校では特に、不潔な感じのする男性教員の触れたプリント類には触れないという思いが強く、どうしても触らざるを得なかったときには、入念に手を洗っていた。外では洗う回数は少し控えていたが、家に帰ると、すぐに衣類をすべて着替えて、何度も手を洗い、手洗いは1日に数十回に及ぶこともしばしばあり、石鹸も3日で使い切ってしまうとのことであった。

来院半年ほど前から近所の内科に通院し、SSRIの投与を受けていたが、症状の改善がみられず、専門科に紹介されて来院した。

＜治療＞当初の処方を漸減しながら、主にカウンセリングを多用して、家庭環境（特に母子関係）の調整を行いながら、一方で他のSSRIを処方したが、4週間ほど経過した時点で評価したところ症状には顕著な改善はみられなかった。本人

は、改善が思うように進まないため、診察中にシクシク泣き出すこともあった。その頃には、母子共に治療者への信頼関係もできていたので、ホメオパシーについて説明して、その試行を了解してもらったところで、本人の性格、症状から洗浄強迫に適用のあるレメディを処方した。2週間後に再来院されたところ、手の洗浄回数はかなり減って驚いているということで、母子共に明るい顔になっていた。「いつまで通院しなければならないのでしょうか」と治療の終結に積極的な姿勢がみられ、しばらく経過をみながら西洋薬を漸減し終結した。

＜特徴＞母と生活のテンポが合わず、急かされ勝ちで自己評価が低い、不潔への恐怖、本来はのんびりして温かい人柄、泣き虫

＜処方＞Lac caninum 30c 1回のみ

5-2. 不安・めまい、吐き気

＜患者＞高校3年の男子学生

＜主訴＞夜になると不安とめまいがあり、吐き気をともなう。吐いたことはない。

＜経過＞事情があって、現在祖父母に育てられている。目下のところ受験勉強中で、進路にも迷いがある。勉強をしないと大学には合格できないので、夜と朝早くに勉強している。睡眠不足ではない。本人は真面目な社会性のある性格で、友人も多いとのことであった。試験のことが心配になり、お腹が痛くなることもあるとのこと。一応の志望は国立大学の教育学部であるが、それは祖母の希望であった。

＜治療＞少量の抗不安薬投与で1ヶ月ほど診察を続けたが、やや改善は見られたものの、増量すると眠気が襲って勉強に差し障りがあるため、また本人にはまだ納得できるほどの改善ではなかったため、ホメオパシーについて説明し、了解を得た上で、予期不安、下痢・便秘などの症状とはっきりしない性格を考慮して、レメディを処方した。すると、2週間後には、それまでの地味なヘアースタイルとは打って変わって、現代的な髪型に変わり、大学の志望も、

本当は行きたかった私大理学部コンピュータ関連学部に行くことにしたと明るく話すようになっていた。症状はもう心配ない位だということだったので、しばらく経過をみて治療を終結した。

＜特徴＞試験前にお腹の調子が悪い、自信がない

＜処方＞Argentum nitricum 30c 1回のみ

他に、不安発作、リストカットのある20代の女性数名にも説明の上、レメディを処方したが、それは余り功を奏さなかった。疑いの少ない若い世代に効果があるのか、あるいは提示事例は、2者とも症状が典型的であったところからレメディ選択が比較的容易であったためか、今後の課題である。

6. おわりに

以上みてきたように、ホメオパシーは、全人的医療を標榜する、個人に根ざした実証的医療である。より普遍性の高い一般化を導くことに主眼を置いた通常医学の思考とは一線を画している。細部にわたって個性記述的でありながら、経験的・実証的であるホメオパシーは、東洋医学に通じる西洋起源の医療であるといえよう。患者さんの症状だけでなく、心理、生活史にも強い関心を向ける点では、精神医学的・精神病理学的・心理学的知見も有効であろう。対人関係における敏感さ、気配りといった洗練された繊細な人間理解が持ち前の日本人には、ホメオパシーは性に合うであろうし、日本人には日本人のホメオパスが最適であろう。その人間理解の繊細さ故に、日本のホメオパスは、*narrative based medicine*をリードできる資質をも有している場合が多いのではないだろうか。その意味で、西洋医学に主眼をおかない、地域風土の特殊性を加味した新しい全人的医療としてのホメオパシーを、我々日本人が目指すのは適切で賢明な選択なのではないだろうか。もちろんその世界水準にある科学研究手法をもちいた波動医学の推進も期待されている。

引用文献

- [1] Gerber, R., Vibrational medicine, 1988 (ガーバー、R.『波動医学』, 上野圭一監訳, 日本教文社, 東京, pp.94-95, 2000)
- [2] Leckridge, B., Homoeopathy in Primary Care, churchill Livingston, London, 1988
- [3] 日本ホメオパシー医学会HP
<http://www.jps-homeopathy.com/>
- [4] Reilly, D., The puzzle of homeopathy, J Altern Complement Med, 7, Suppl 1: S103-9, 2001
- [5] Reilly DT, Taylor MA, McSharry C, Aitchison T. Is homeopathy a placebo response? Controlled trial of homeopathy potency, with pollen in hay fever as model, Lancet, 881-886, 1986
- [6] Reilly D, Taylor MA, Beattie NG, Campbell JH, McSharry C, Aitchison TC, Carter R, Stevenson RD., Is evidence for homoeopathy reproducible?, Lancet, Dec 10; 344(8937): 1601-6, 1994
- [7] Taylor MA, Reilly D, Llewellyn-Jones RH, McSharry C, Aitchison TC., Randomised controlled trial of homoeopathy versus placebo in perennial allergic rhinitis with overview of four trial series, BMJ, Aug 19-26; 321(7259): 471-6, 2000
- [8] Itamura R, Hosoya R., Homeopathic treatment of Japanese patients with intractable atopic dermatitis, Homeopathy, Apr; 92(2): 108-14, 2003
- [9] Hahnemann, S., (O'Reilly ed.) Organon of the Medical Art, Bird cage books, Palo Alto, p.4, 1996 (Adopted from the sixth edition of the Organon der Heilkunst, 1842)
- [10] ガーバー, R., 前掲書, pp.45-84
- [11] ガーバー, R., 前掲書, pp.88-108,
- [12] Vermeulen, F. Prisma. Emylss, Haarlem, pp.221-230. 2002
- [13] 高橋暁正, 漢方の認識, 日本放送出版協会, 東京, pp.18-23, 1969
- [14] Yamashita H, Tsukayama H, Sugishita C., Popularity of complementary and alternative medicine in Japan: a telephone survey, Complement Ther Med, Jun; 10(2): 84-93, 2002

参考文献

< MATERIA MEDICA >

1. Vermeulen, F. Synoptic Materia Medica. Marlijn Publishers, Haarlem, 1992

< REPERTORY >

1. Murphy, R. Homeopathic Medical repertory second ed.

harnemann Academy of North America, Pagosa Springs, 1998

2. Schroyens, F. ed Synthesis 7.1. Homeopathic Book Publishers, London 1998

Abstract

The author overviewed homeopathy as one of the complementary and alternative medicine, and discussed on the possible development of Homeopathy in Japan. At first, the author described what homeopathy is, and then discussed homeopathy with a view of Evidence Based Medicine and of Narrative Based Medicine. And then the author examined the possibility of Japanese way of development in Homeopathy. The examined categories were as follows. 1. The common and different aspects between homeopathy and Kampo. 2. Remedization of Kampo. 3. Production of the remedy made in Japan. 4. Complexity of the remedy pictures and the sample picture. 5. Climates and medical treatment. And two case reports were presented. As homeopathy needs holistic approach and Japanese way of living grow the sensitivity in interpersonal perception, the Japanese way of development in homeopathy is expected mainly in clinical situations. Then the sophistication of vibrational medicine is also expected, which will be the most dominant theory that explains the alternative explanatory concept of body function. And then, the effects of homeopathic therapy will be logically explained.

Key Words: homeopathy, remedy, the Japanese way of development, kampo, vibrational medicine